
バクフーン達の冒険・番外編 スペシャルエピソード グランドバトル！

バクフーン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バクフーン達の冒険・番外編 スペシャルエピソード グランドバトル！

【Nコード】

N0079L

【作者名】

バクフーン

【あらすじ】

バクフーン達の冒険、2周年記念作品！

ラウンド1（前書き）

ラグラージ

「ねえ、なんでグラランドバトルなの？」

いや最初はバトルグランプリにしようと思ったんだけど、それはハ
ーブさんがやるからダメでしょ？

次に“バトルだよ、全員集合！”にしようと思ったんだけど、ド

フじゃん（汗）

ってな事でグラランドバトルに……

ラグラージ

「……………ねえ、ワ　ースのゲームでそういうタイトルなかった？」

……………あっ（汗）

ラウンド1

「さあ、会場に集まった観客の皆！ 強者達が集まったバトルの祭典、“グランドバトル”の始まりだーっ！」

とある場所に用意された巨大なスタジアム。

そのスタジアム中央で片手にマイクを持ち、集まった観客達に声を掛けているポケモンが1人。

青を基調とした体色、なんでも噛み砕いてしまいそうな巨大な口を持ったワニに似た姿をしたポケモン オーダイルだ。オーダイルが観客達に祭典が始まる事を告げると観客達は大きな歓声を上げる。

「今回“グランドバトル”を司会進行するのはこの俺、オーダイルがやらせてもらうぜ！ 皆、盛り上がっていきこうぜ！」

小指を立てた状態でマイクを持ったまま、オーダイルがそう観客達に呼び掛けると再び歓声上がる。

「オツケー、いい感じに盛り上がってるじゃねえか！ それじゃ、最初にバトルをしてくれるトップバッターを紹介するぜ！ 赤コーナーから、強い奴と戦う事が好きだと言う程バトルが大好きな炎のポケモン、バクフーンの入場だーっ！」

オーダイルがそう言うのと赤コーナーから1人のポケモンが現れ、スタジアム中央に向かって走り出す。

フサフサとした体毛を持ち、深緑色をした背中にクリーム色をした腹、三角形の小さな耳があり、顔は何処かネズミに近い。そしてまるで炎みたいに赤い瞳を持っているポケモン バクフーンである。

る。

「よろしくな」

中央までやってきたバクフーンは観客達に向けて手を振りながら軽く挨拶する。

「そして青コーナーから、仲間や子供を大切に思う優しき心と燃えるような心を合わせたポケモン、リザードンの入場だーっ！」

青コーナーから1人のポケモンがゆっくりとスタジアム中央に向かって歩いてくる。

橙色を基調とした体色で竜を思わせるような顔をしており頭部には角が2本、首はやや長い。背中には一組みの立派な翼、そして長い尻尾もあり、尻尾の先端には炎が灯っているポケモン　リザードンである。

「こりやまた、ずいぶんたくさんの客が来てるなあ」

スタジアム中央にやってきてから辺りを見回し、観戦しに来た観客達が多い事に驚いているリザードン。

「リザードンが相手か、こりや楽しくなりそうだぜ」

バトルする相手がリザードンだとわかると、バクフーンはなんだか嬉しそうに笑みを浮かべる。

「バクフーン、幼なじみだからって手加減しないからそのつもりだな」

「当たり前だろ？ 手加減なんかしたら怒るからなりザードン」

バクフーンとリザードンはいつでも攻撃出来るよう戦闘体勢に入る。

「2人共準備良いみたいだな？ よし、それじゃ早速始めるか！」

バトルの邪魔にならないよう、オーダイルはバクフーン達から離れる。

「そんじゃいくぜ……バトル、スタートッ！」

「電光石火！」

ある程度バクフーン達から離れたオーダイルは大きな声を出してバトルの開始を宣言する。

それと同時にバクフーンは素早い身の熟こなしでリザードンに接近していく。

「やっぱりそうきたな、地震！」

「わわっ!?!」

バクフーンの行動を予測していたリザードンは全体重を掛けて思いつきり地面を右足で踏む。

するとスタジアム全体が大きく揺れ始め、バクフーンは立っていられなくなつてその場で尻餅しりもちをついてしまう。

バクフーンが尻餅をついている間にリザードンは翼を力強く羽ばたかせて空中へと飛び、バクフーンから離れる。

「やったなあリザードン、火炎放射！」

立ち上がったバクフーンは口から強力な炎を吐き出し、空中にいるリザードンに向けて放つ。

「だったらこつちも火炎放射だ！」

リザードンもバクフーンと同じく口から強力な炎を吐き出し、バクフーンが放った炎にぶつける。2つの炎がぶつかり合った瞬間大きな爆発が発生する。

「エアスラッシュ！」

すかさずリザードンは次の攻撃を仕掛ける。

力強く翼を羽ばたかせる事によって発生した突風は空気の刃となり、バクフーンに襲いかかる。

「電光石火！」

しかしバクフーンはこれを素早い身の熟しで軽々と回避する。

「お前なら避けるって思ってたぜバクフーン！」

バクフーンが必ず自分が放った技を回避すると予測していたリザードンは、バクフーンの目の前まで急降下して迫っていた。

「げっ！？」

「くられ、気合いパンチ！」

落下スピードを利用した、リザードン渾身の右ストレートが炸裂。
リザードンの拳はバクフーンの顔に直撃した……と思われたが。

「あ、危ねえ……」

リザードンの拳が直撃する寸前でバクフーンは両手でしっかりと受け止めていたのだ。

「今の攻撃を受け止めるとはさすがバクフーン……だが！」

素早くバックステップしてバクフーンから少し離れるとリザードンは体を回転させ、自分の太く長い尻尾をバクフーンの脇腹わきはらに直撃させる。

「がはっ!?!」

まともに受けてしまったバクフーンは真横に吹き飛ばされてしまっ
う。

吹き飛ばされたバクフーンは体を壁に打ちつける。

「お前が気合いパンチを受け止めてくる事も予測していたんだよ。
付き合いが長いと、どの攻撃が通用しないかやお前が何を考えてい
るのが大体わかるからさ」

リザードンはバクフーンが取る行動を全て予測していた。
幼なじみで1番の親友であるリザードンだからこそ出来る事であ
る。

「……へへ、さっすがリザードンだぜ。やっぱりバトルはこうでなく
つちなな」

吹き飛ばされて壁に体を打ちつけたにも拘らず、何事もなかったかのように立ち上がったバクフーン。

リザードンとのバトルが楽しくてしょうがないようで満面の笑みを浮かべている。

「……長く付き合っても、やっぱりお前のバケモンみたいな体力には驚かされるな……あれを受けたら普通の奴だったら少しは弱ってる筈だぜ？」

何事もなかったかのように立ち上がったバクフーンを見てリザードンは苦笑いする。

「こんな楽しいバトルやってんのに弱ってなんかられるかって！いくぜリザードン、はぁっ！」

バクフーンが体に力を入れると背中から大量の炎が吹き出し始める。

吹き出された炎は勢いを増し、バクフーンの体全体を覆っていく
プラスチックモードである。

「出たなプラスチックモード……ならこっちもいくぜ！」

リザードンも体に力を入れる。すると尻尾の先端に灯っていた炎が勢いを増して大きく燃え上がる。大きく燃え上がった炎はリザードンの体全体を覆っていく。リザードンもプラスチックモードになったのだ。

「いくぜ、火炎放射！」

バクフーンは口から強力な炎を吐き出してリザードンに向けて放つ。

吐き出された炎は先ほどの炎よりも数倍パワーが上がっている。

「ならこっちもだ！」

リザードンもまた口から強力な炎を吐き出し、バクフーンが放った炎に向けて放つ。

こちらの炎も先ほどよりも数倍パワーが上がっている。

2つの炎はぶつかり合い凄まじい爆発が発生する。

「電光石火から気合いパンチ！」

炎が相殺されたと同時にバクフーンは素早い身の熟しでリザードンに接近、渾身の右ストレートを顔に直撃させようとする。

しかしこれを予測していたリザードンはバクフーン渾身の右ストレートを紙一重で回避する。

「ドラゴンクロー！」

バクフーンの攻撃を回避したりザードンは反撃で右手の鋭い爪で切り裂こうとバクフーンに攻撃する。

しかしバクフーンは咄嗟とっさにリザードンの右手首を左手でしっかりと掴み、攻撃を中断させる。

「おらぁーっ！」

リザードンの攻撃を中断させた後、バクフーンは両手で右手首をしっかりと掴んでからリザードンを振り回し始める。

ある程度勢いがついたら掴んでいた手を離してバクフーンはリザ

ードンを壁に向かって放り投げる。

「くっ！」

リザードンは翼を羽ばたかせて壁にぶつかる一歩手前でなんとか体勢を立て直す。

「気合いパンチ！」

体勢を立て直したばかりのリザードンに向かって素早く接近したバクフーンは渾身の右ストレートを繰り出す。

「させるか！ 気合いパンチ！」

リザードンもバクフーンと同じ技で対抗、2人の拳と拳がぶつかり合う。

互いの拳がぶつかり合った瞬間スタジアム全体に衝撃音が響き渡り、バクフーンとリザードンは衝撃で2人共後方へ吹き飛ばされる。

「オーバーヒート！」

後方へ吹き飛ばされながらもバクフーンは口から炎エネルギーを凝縮したエネルギー波を吐き出し、リザードンに向けて放つ。

だがリザードンはすぐさま翼を力強く羽ばたかせて上へと上昇してこれを当たる寸前で回避する。

「いくぜバクフーン、俺のとおきを見せてやる！」

リザードンは体に力を入れる。するとリザードンを包んでいる炎から複数の丸い炎の塊が出現、それらは出現すると同時に少しずつ

大きくなっていく。

「なんだ？ リザードンの奴何をする気だ？」

リザードンが何をしようとしているのかわからないバクフーンは首を傾げながら見つめる。

そうしてる間にもリザードンが作り出した炎の塊はさらに大きくなり、ボール程の大きさだった塊はバクフーンやリザードンよりも大きくなっていった。

「くらえバクフーン、俺が考えたオリジナル技……メテオ・フレイム！」

リザードンが右手をバクフーンに向け翳すと、周囲に浮遊していた巨大な炎の塊はまるで流星群のようにバクフーンに降り注ぐ。

「こりやさすがに避けるのは無理か……だったらあれしかねえ！」

バクフーンが体に力を入れると、彼を包んでいる炎が勢いを増して大きく燃え上がり始める。

「全部俺の炎で飲み込んでやる……天照！」
アマテラス

バクフーンの炎はまたさらに大きくなり、向かってきているリザードンが放った炎の塊を飲み込んでしまう。

飲み込まれた塊はバクフーンの炎の一部となり、消滅してしまう。

「くっ……はあ、はあ、はあ……」

バクフーンが使用した技“天照”は体力を大きく消費するようで、

リザードンが放った技を消滅させたまでは良かったがかなり辛そうにしている。

「隙ありだぜ！」

いつの間にかバクフーンの背後に回り込んでいたりリザードン。

リザードンは背中からバクフーンをしっかりと抱きしめ動きを封じる。

「こ、このっ!?!」

リザードンから逃れようともしなくバクフーンだが、リザードンは放さないようしっかりと抱きしめている為になかなか抜け出せない。

「俺のメテオ・フレイムを破る為に、絶対天照を使うと思ってたぜバクフーン。俺はこの時を待っていたんだ」

バクフーンをしっかりと抱きしめたまま勝利を確信したのか、笑みを浮かべているリザードン。

「……メテオ・フレイムは**囷**だった訳か……」

「そういう事だ。さあ……これでフィニッシュだ！」

リザードンはバクフーンを抱きしめたまま翼を力強く羽ばたかせて飛び上がる。そしてある程度上昇すると今度は地面に向かって急降下していく。

「くっ……」

どうしてもリザードンから抜け出せないバクフーンは諦めてしまったのか、目を閉じてしまう。

「俺の勝ちだ、バクフーン！」

落下スピードを利用して、リザードンはバクフーンを地面に思いっきり叩きつける。

バクフーンの体が地面に叩きつけられた事により鈍い音がスタジアム全体に響き渡り、砂塵が舞い上がりバクフーンの姿が見えなくなる。

バクフーンを叩きつけた後、リザードンはバクフーンから少し離れた場所に悠々（ゆうゆう）と着地する。

それからしばらくすると舞い上がっていた砂塵は収まり、うつ伏せに倒れたままピクリとも動かないバクフーンの姿が現れた……戦闘不能になってしまったのか、それを確認する為にオーダイルが急いでバクフーンに駆け寄る。

「……うーん、こりやもう無理かな。意識がないようだし……バクフーン戦闘不能！ よって勝者」

オーダイルがリザードンの勝利を宣言しようとした時、突然うつ伏せになって倒れていたバクフーンの体が光り輝き始める。そしてバクフーンの体は光の粒子となって消滅した。

バクフーンが消えてしまった場所には大きな穴が空いていた。

「えっ、消えた!？」

突然バクフーンが消えてしまった事に驚いているオーダイル。

「身代わりか……そして地面に空いた穴……まさか!？」

「そのまさかだよ！ 気合いパンチ！」

何かに気づいたりザードンだったが時すでに遅し……リザードンが立っている地面の下から突然バクフーンが勢いよく飛び出してきた。

そしてバクフーンは渾身のアッパーをリザードンの顎あごに直撃させる。アッパーを受けたリザードンは宙に吹き飛ばされ、背中から地面に落下する。

仰向けになって倒れたまま、リザードンはピクリとも動かない。完全に気を失ってしまっているようだ。

「あら、クリーンヒットしちゃったみたいだな……おいオーダー、コールまだか？ リザードン完全に伸びちゃってるみたいなんだけど」

「……あっ、あゝそうか。リザードン戦闘不能！ よって勝者バクフーン！」

リザードンが戦闘不能である事を大きな声を出して観客達に告げる。

白熱したバトルに興奮した観客達は一斉に大きな歓声を上げる。

「おゝい、起きろリザードン」

バクフーンは気を失っているリザードンの頬を軽く叩いて起こそうとする。

「……う、うん……はっ!？」

意識を取り戻したりザードンは飛び起きる。

しかし現在の状況がわからないリザードンは辺りをキョロキョロとする。

「ど、どうなったんだ？」

「へっへっ、悪いなりザードン、俺の勝ちだぜ」

バクフーンは右手でピースしながら自分がバトルに勝った事を満面な笑みを浮かべてリザードンに告げる。

「……あっ、そうか。俺は地面から飛び出してきたお前に一発殴られて……ってかお前、なんであの攻撃を受けたのにピンピンしてんだよ？」

「あゝ、それは簡単さ。お前が俺を地面に叩きつける前に眠るを使って体力を回復したからだよ」

眠る　それは名前の通り眠る技だ。

眠る事によって自身の体力を完全に回復出来るのだ。

バクフーンは地面に叩きつけられる前に眠って体力を回復していたのだ。

「んでもって、叩きつけられた衝撃で目が覚めた俺は砂塵が消える前に穴掘って地面に潜るだろ？　そして穴がバレないように身代わりで蓋ふたをしてって感じ」

バクフーンは自分なりの言い方でリザードンに今までの事を説明する。

「そういう事が……はあ、勝てると思ったのになあ……でも楽しかったぜバクフィン」

「俺もだぜリザードン、またやろうぜ？」

「嗚呼ああ！」

バクフィンとリザードンは互いに握手をし、笑みを浮かべてまたバトルをしようと約束を交わすのであった。

ラウンド1（後書き）

バクフーン

「ふい〜、疲れたぜ〜」

リザードン

「嘘言え、全然元気そうじゃねえかよ（汗）」

バクフーン

「いやいや、これでも疲れてるんよ?」

リザードン

「……まあいいや。それより次の組み合わせ、お前知ってるか?」

バクフーン

「いや知らん」

リザードン

「やっぱし（汗）」

バクフーン

「誰なんだ?」

リザードン

「それは」

オーダイル

「はいストリップ! そっから先はトップシークレットだぜ?」

バクフーン

「うお！？ なんか出た！？」

オーダイル

「出たと言っな（汗）」

ラウンド2 (前書き)

バクフィン

「レナ、せっかくのゴールデンウィークだからどっか出掛けるか？」

レナ

「あつ、良いわねバク君　私彼処行きたいなあ、デイ　ーラ」

「こらこらお二人さん、何ここでいちゃいちゃしてるんよ？」(汗)

バクフィン

「別にいちゃいちゃしてねえよ、なあレナ？」

レナ

「ねえ？」

「……まあ、いいや」(汗)

ラウンド2

「さあ次は一体誰が出てくるのか、皆もう気になってしょうがないよな？ 選手の準備が出来たようだから、第2ラウンドを始めるぜ！」

スタジアム中央でオーダイルが“グランドバトル”第2ラウンドを開始する事を観客達に告げると、観客達は待ってましたという感じで大きな歓声を上げる。

「まずは赤コーナーから……クールなように見えて実は熱い魂を持ち、妹思いな優しい兄貴……ポケモンレンジャー、ラティオスの入場だーっ！」

赤コーナーから1人のポケモンが現れ、ゆっくりとスタジアム中央へと向かっていく。

青と白を基調とした体色、胸には三角形の形をした赤いラインがあり、何処か竜をイメージさせる姿をしたポケモン ラティオスである。

「続いて青コーナーから……女性に振られた回数は数知れず、何回振られようとも懲りずに今日も女性にアタック！ 彼女が欲しくてたまらない独身男」

「変な紹介するなーっ！」

「へぶしっ!？」

オーダイルが次に出てくるポケモンを紹介していた時、青コーナ

ーから1人の小さなポケモンが凄い勢いで走ってきてオーダイルの顔に向かって飛び蹴りを炸裂させる。

オーダイルに飛び蹴りを炸裂させたポケモンは黄色を基調とした体色をしており、尻尾は雷をイメージさせるようなギザギザの形をしていて姿はネズミに近く、両頬には電気袋と呼ばれる赤くて丸い袋がある。ピカチュウである。

「おいオーダイル！ なんださっきの俺の紹介はよ？ もっとちゃんとした紹介しやがれ！」

ピカチュウはよっぽどオーダイルの紹介が気に入らなかったようで、腕組みをして険しい表情をしながらオーダイルに怒鳴る。

「痛たた……俺は事実を言ったただけだろうが！ こういう紹介されなくなったらさっさと彼女作れ！」

飛び蹴りを受けた右頬を右手で押さえながらオーダイルはピカチュウに反論する。

「お前なんかに言われたくねえよ！ お前だって彼女いねえだろうが！」

「俺は彼女がいらないんじゃないかと彼女を作らないだけだ。彼女を作れば俺を好いてくれる女性ファン達がショックを受けてしまうからな」

「はっ、そんな事言ってお前だって毎回振られてんだろ？」

「んな訳あるかこのナンパマン！」

「んだと!?!」

互いに睨み合いながらしようもない事で口論を続けるオーダイルとピカチュウ。

そんな2人を呆れた表情で見つめるラティオス。ラティオスだけじゃなく、観客達全員もこのしようもない口論に呆れている。

「はあ……いい加減にしろよ2人共、ここはバトルをする場であつてケンカする場じゃないだろ？ それにいつまでも観客達を待たせる訳にもいかないだろ、皆待ちくたびれてるぞ」

ラティオスは右手で頭を押さえ、呆れた表情を浮かべながらオーダイルとピカチュウにもうケンカをやめるように注意する。

それを聞いた2人は口論をやめて観客達に顔を向ける。観客達は皆まだバトルが始まらないのかとずっと待っていた。

なかにはしようもない事で口論していた2人にブーイングをする者までいる。

『……すんませ〜ん』

オーダイルとピカチュウはしょんぼりとしながら盛り上がっていた会場の雰囲気をぶち壊してしまつた事に深く反省する。

「さ、さて……じゃあ気を取り直して早速バトルを始めるとするか！ ラティオスにピカチュウ、準備はいいか？」

「俺はいつでも大丈夫だ」

すでに準備出来ていたラティオスはすぐに返事をする。

「俺も……つとバトルする前にラティオス、お前に1つ言っておく

事がある」

「言っておく事？　なんだピカチュウ、その言っておく事って？」

「このバトル、俺が勝ったらラティアスちゃんを俺の嫁にするからな！」

人差し指でビシツとラティオスを指しながら、ピカチュウはバトルに勝ったらラティオスの妹であるラティアスを自分の嫁にすると宣言した。

「……はあ！？　なんで俺が負けたらラティアスをお前の嫁にせいやならんのだ！？」

当然ラティオスはピカチュウの発言に驚きの声を上げる。

「お前が勝てば別に問題ないだろ。まさか、俺に負けるのが怖いのか？」

ラティオスを挑発するピカチュウ。

いつもの冷静なラティオスならこんな挑発には乗る事はないが、妹の事となると冷静ではいられなくなってしまうラティオスは……

「……いいだろ、ただし俺が勝ったらラティアスの事は諦めるんだぞ」

ピカチュウの挑発にまんまと乗ってしまったのである。

「よし決まりだ！　じゃあ、気合い入ってきたぜー！」

勝てばラティオスを嫁に出来る……ピカチュウはいつも以上に気合を入れる。

「話は終わったみたいだな？　そんなじゃ始めるか！　アーユーレデ
イ？」

オーダイルが尋ねるとラティオスとピカチュウは戦闘体勢に入り、準備出来てる事を頷いて応える。

「オツケー……ラティオスVSピカチュウ！　バトル、スタートオ
ーッ！」

オーダイルがバトルの開始を宣言したと同時にピカチュウは素早い身の熟しこなでラティオスに接近していく。

「先手必勝、アイアンテール！」

ピカチュウはラティオスに向かってジャンプ、尻尾にエネルギーを集めて鋼のように硬くし、体を縦たてに回転させながらラティオスの頭に尻尾を振り下ろす。

「ドラゴンクロー！」

ラティオスはこの攻撃にすぐさま対応、右手の鋭い爪をピカチュウが振り下ろした尻尾にぶつける。互いのパワーは互角、技を相殺された2人は衝撃で後方に吹き飛ばされる。

「10万ボルト！」

吹き飛ばされながらもピカチュウは頬にある電気袋から強力な電

撃を放出、それをラティオスに向けて放つ。

「守る！」

ラティオスは自分をエネルギーの膜まくで包み込む。それはバリアのような働きをしてピカチュウが放ってきた電撃から自分の身を完璧に守る。

「シャドーボール！」

ピカチュウの攻撃を防ぎきったラティオスはかさず反撃、両手で作り出した黒いエネルギー弾を空中にいて身動きが出来ないピカチュウに向けて放つ。

「くらつかよ、アイアンテール！」

ピカチュウは尻尾を再び鋼のように硬くして、向かってきた黒いエネルギー弾に尻尾を叩きつけて地面へ弾き飛ばす。

弾き飛ばされた黒いエネルギー弾は地面にぶつかると同時に爆発して消滅、そしてピカチュウは安全に地面へ着地する。

「影分身、そして高速移動！」

着地するや否やピカチュウは無数の幻影を作り出し、それから素早い身の熟しでラティオスに再び接近していく。

「俺を攪乱かくらんしようってか？ 悪いがそうはいかないぜピカチュウ、ラスターパージ！」

ラティオスは目を閉じて強く念じ始める。

するとラティオスの体から目映い光が発せられ、その光はラティオスを中心に大きく膨れ上がる。

「うっ!？」

ラティオスから発せられる光があまりの眩しさにピカチュウは思わず目を閉じて動きを止めてしまう。止まっている間に膨れ上がっていた光がピカチュウを飲み込んでしまった。

「くっ……どうなってやがる？」

少しずつ光に目が慣れてきたピカチュウはゆっくりと目を開ける。光に包まれたそこは辺り一面真っ白な世界になっていた。

「ここは俺がラスターパージで作り出した光の世界だ。そして……ここからがラスターパージの真骨頂、悪いが一気に決めさせてもらうぞピカチュウ！」

光の中心にいるラティオスは両手を横に広げて意識を集中させる。するとラティオスの周囲にエネルギー弾が数個現れ、その場で浮遊する。エネルギー弾は周りの光と同じ輝きを放っている為、ピカチュウにはそのエネルギー弾は見えていない。

(ラティオスの奴、何か仕掛けてきやがるな……)

エネルギー弾は見えていないピカチュウだが、ラティオスが何かを仕掛けてくる事を気配で感じ取り警戒する。

「くらえ！」

ラティオスは再び強く念じ始める。すると周囲に浮遊していた無数のエネルギー弾は一斉にピカチュウに向かっていく。

「ぐっ!？」

エネルギー弾が見えないピカチュウは回避する事が出来ず、エネルギー弾の1つが腹部に直撃する。それによりピカチュウは後方へ大きく吹き飛ばされ、さらに飛ばされた先からまた別のエネルギー弾がやってきてピカチュウの背中に直撃する。

その衝撃でピカチュウは地面へ吹き飛ばされ、うつ伏せに倒れる。

「くっ、き、効いたぜ……なるほど、見えない攻撃ってやつか……」

痛みで表情が歪むピカチュウだが、なんとか立ち上がって再び戦闘体勢に入る。

「さすがピカチュウ、2発受けた位じゃ倒れないか。だが、次は耐えられまい！」

ラティオスは一気に勝負を決めようと再び強く念じ始める。すると四方八方から無数のエネルギー弾がピカチュウに向かって突っ込んでいく。

「くらうか、10万ボルト！」

ピカチュウは体を横に回転させながら強力な電撃を放出する。

回転しながら放った電撃は周囲に拡散し、向かってきていたエネルギー弾全てに直撃、エネルギー弾は爆発する。

「まずはここから脱出しねえと……高速移動！」

攻撃を全て防いだ後、ピカチュウは素早い身の熟しでラティオスが作り出した光の世界から脱出する。

「雲は……雲は出てるか？」

光の世界から脱出したピカチュウは空を見上げ、雲を探す。このスタジアムには屋根は無く、空が見えるのだ。

「……見つけたぜ、雷！」

上空にふわふわと浮かぶ1つの雲を見つけたピカチュウはそれに向かつて先程放った電撃よりもさらに強力な電撃を放つ。

電撃は雲に直撃、電撃を受けた雲は雷雲へと変化して雷を落とす始める。

「来やがれ雷！」

ピカチュウは尻尾を雲に向かつて伸ばし、避雷針のようにする。次の瞬間雷雲から凄まじい雷がピカチュウに向かつて落下、直撃する。

「ぐっ!? あ、相変わらず……キツイぜ……」

強力な雷を身に受けて苦痛の表情を浮かべるピカチュウだが必死に耐える。そして少しずつ受けている雷のエネルギーを自身の体内に取り込んでいく。

「くっ、しまった……」

ピカチュウが雷雲から発生した雷を体内に取り込んでいる時、ようやくラティオスが光の中から姿を現す。

「うおおおお！」

ラティオスが姿を現すと同時にピカチュウは雷エネルギーを全て体内に取り込む事に成功する。

雷エネルギーを全て取り込んだピカチュウの体は全身が金色こんじきに輝いている。ライジングモードになったのだ。

「ふう〜……さあ反撃開始だぜ、高速移動からアイアンテール！」

ライジングモードになったピカチュウは先程よりも倍のスピードでラティオスに接近、そして鋼のように硬くした尻尾でラティオスを攻撃する。

「守るが間に合わない、ドラゴンクロー！」

防御が間に合わないと判断したラティオスは最初と同じように鋭い爪でピカチュウの攻撃を相殺させようとする。

しかし、ピカチュウのパワーが先程より数倍上がっていて相殺どころかラティオスの攻撃は弾かれてしまう。

「なっ!?!」

「ライジングモードになった俺のパワーを甘く見んな! アイアンテール！」

攻撃を弾いたピカチュウはすかさずラティオスに鋼のように硬くした尻尾を叩きつける。

攻撃をまともに受けたラティオスは大きく後方へ吹き飛ばされ、壁に体を打ちつける。

（くっ、想像以上にパワーが上がっている……これがピカチュウのライジングモードなのか……）

ライジングモードになったピカチュウと初めて戦うラティオスは、数倍以上にパワーが跳ね上がっている事に驚いている。

（真っ正面からぶつかり合っているのは確実に俺は負ける……もし俺が負けたらラティオスは奴の……）

とここでラティオスは頭の中で妹のラティアスとピカチュウが結婚する場面を想像する。

（……絶対負けられない！ ウエディングドレスを着たラティアスは見たいがピカチュウと結婚などさせられるか！ それだけは断固阻止せねば！）

ピカチュウとラティアスが結婚する事を絶対に阻止したいラティオスは今まで以上に真剣な表情になる。

「これで決めるぜラティオス！ 雷！」

ピカチュウは最大パワーの強力な電撃を放出、ラティオスに向けて放つ。

「その雷、利用させてもらっ！ サイコキネシス！」

ラティオスは放たれた電撃を凝視しながら強く念じ始める。

すると向かってきていた電撃はまるで時が停まったかのようにその場で静止する。

さらにラティオスは念じて雷をコントロール、操られた雷はラティオスを中心にまるで蛇が壱しんくわを巻くようにぐるぐると渦巻き始める。

「くられ、サンダー・ドラグーン！」

ラティオスにコントロールされた電撃は勢いよくピカチュウに向かって突っ込んでいく。

突っ込んでいく電撃の形が変形し、まるで竜のようになってピカチュウに襲いかかる。

「俺が放った雷をコントロールしやがったか……けどよ、今の俺に電気技は通用しねえんだよ！ ボルテッカー！」

ピカチュウの体から凄まじい電気が放出され、それはあつという間に体を覆い尽くす。

それはまるで電気の鎧のようだ。電気の鎧を身に纏まとったピカチュウは素早い身の熟しでラティオスがコントロールしている電撃に向かって突っ込んでいく。

ラティオスがコントロールしている電撃と電気の鎧を身に纏ったピカチュウがぶつかり合う。

しかしピカチュウは勢いが衰える事なくどんどん突き進み、ラティオスがコントロールしている電撃を突き破ってしまった。

「これで本当に最後だラティオス！」

ピカチュウはラティオスに向かって高くジャンプ、そして体内に取り込んだ雷エネルギー全てを尻尾に集めていく。

金色に輝いていた体は元に戻ったが、エネルギー全てが集まって

いる尻尾だけはまだ輝いて……いや、さらに輝きを増していた。

「ライジング・アイアンテール！」

体を縦に回転させながらピカチュウは雷エネルギー全てを集めた尻尾を勢いよくラティオスに向かって振り下ろし、直撃させる。直撃した瞬間爆発が発生し、ラティオスとピカチュウは爆煙に包み込まれる。

「……くっ、まだそんな力が残っていやがったのか……」

爆煙はすぐに収まり、ピカチュウとラティオスの姿を確認出来るようになる。

ピカチュウの攻撃を受けたラティオスは激痛で表情を歪ませていたが、攻撃を繰り返したピカチュウも同じように表情を歪ませていた。

よく見てみると、ラティオスの左手にある鋭い爪がピカチュウの腹部に直撃していた。

ラティオスはピカチュウの攻撃を受けながらもしっかりと反撃していたのだ。

「ドラゴンクロー……お前には絶対に、ラティアスをやる訳にはいかないから、な……」

「……へっ、この野郎、が……」

ラティオスとピカチュウはお互いに崩れ落ちるようにその場に倒れ込んでしまう。

それを見たオーダイルは2人の状態を確認する為に急いで駆け寄る。

「……ありやま、こりや2人共完全に気を失ってるな……え、ラ
テイオスとピカチュウ共に戦闘不能！ よってこの勝負引き分け！」

2人がこれ以上戦えないと判断したオーダイルは大きな声でこの
勝負は引き分けだという事を観客達に伝えた。

ラウンド2（後書き）

ラティオス

「なんとかラティアスとの結婚は阻止出来たぞ……」

オーダイル

「そんなに嫌なんだな、ピカチュウとラティアスが結婚する事（汗）」

ラティオス

「当たり前だ！ あんな奴にラティアスはやらん！」

オーダイル

「……（こんなんだから周りからシスコンなんて言われるんだよな汗）」

ラティオス

「今何か言ったか？」

オーダイル

「いや何も（汗）おつとそういえば、次回は飛び入りゲストがグラバトに参加するみたいだぜ？」

ラティオス

「飛び入りゲスト？ 誰だ？」

オーダイル

「悪いがそいつぁトップシークレットだ。次回更新されるまでのお楽しみって事で」

ラティオス

「やはり言わないか(汗)」

ラウンド3（前書き）

ギラティナ

「……何故だ？」

パルキア

「ん？ どうしたよ？」

ギラティナ

「何故この俺がグランドバトルに招待されてないんだ？ おかしいだろ！？」

パルキア

「そりゃあれだろ、お前あんま本編で活躍しなかったからだろ。ダークネスに操らるし、速攻ダークネスにぶっ飛ばされるし、ラストなんかお前がいるのかどうかも分からなかったしよ」

ギラティナ

「な、何ーっ！？（汗）」

ディアルガ

「案ずるなギラティナ、グランドバトルに招待されていなくてもお前にはセカンドシーズンで活躍出来るストーリーが用意されているらしいからな」

ギラティナ

「ほ、本当か！？ よし、セカンドシーズンでひと暴れして俺をグランドバトルに招待しなかった事を作者に後悔させてやる！」

パルキア

「……おいディアルガ、その話本当なのか？」

ディアルガ

「ああでも言わねば奴は騒ぎっぱなしだろ？ 時にはつかなければ
ならない嘘もある」

パルキア

「……嘘かよ（汗）」

ラウンド3

「皆待たせたな！ “グランドバトル”、第3ラウンドを始めるぜ！」

ピカチュウとラティオスらが戦った第2ラウンドから数十分後、ステージ中央でオーダイルが第3ラウンド開始を宣言する。

その宣言を聞いた観客達のボルテージは上がり、大きな歓声を上げる。

「さあ、第3ラウンドはダブルバトル！ そして今回はとあるポケモンがゲスト参加してくれたんだ。早速紹介するぜ！ “ヒトカゲの旅 SE” から参戦で有名な探検家であるライナスを父親に持つ息子……だがしかし、似てるかどうかはわからないがとっても怒りやすい短気な奴！ いつも財布の中身が寂しく」

「もつとまともな紹介しやがれーっ！」

「ギャフン！？」

あるポケモンが走ってステージ中央までやってきて、オーダイルの顔に強烈な右ストレートを直撃させる。

オーダイルを殴ったポケモンは青と黒を基調とした体色で体型は人に近く顔は犬に似ており、手の甲と胸にはそれぞれ鋭いトゲのよな物がある。ルカリオと呼ばれるポケモンである。

そしてこのルカリオの左胸には稲妻を思わせるような赤い印がある。

「おいこらワニッ！ 俺はスペシャルゲストなんだぞー！？ ちゃん

とした紹介しやがれ！」

変な紹介をされ怒ったルカリオは右手で握り拳を作りながらオーダイルに怒鳴る。

「痛たたた…… スペシャルゲストが登場していきなり殴るか普通！？ これだから短気な犬は」

「もう1発殴られてえのか？」

殴られたところを両手で押さえているオーダイルが文句を言つと、ルカリオはすでに作っていた握り拳を再びオーダイルの顔に直撃させようと殴る体勢に入る。

「そ、それは勘弁……」

身の危険を感じたオーダイルは素早く後ずさりしてルカリオから離れる。

「さ、さて気を取り直して犬……じゃなくてルカリオのパートナーになるポケモンを紹介だ！ ラウンド2に続いてこのラウンドにも参加、ピカチュウだあーっ！」

オーダイルが大きな声で名前を呼ぶと、ラウンド2で激しいバトルを繰り広げてくれたピカチュウがステージ中央にやってきた。

「おいオーダイル、なんで俺が男と組まなきゃいけないんだよ？俺と組ませるんだつたら女の子だろ！ ラティアスちゃんとかレナちゃんとか、なんでよりもよって犬なんだよ！」

ステージにやってくるなりピカチュウはパートナーがルカリオである事に不満があるようでオーダイルに文句を言う。

ちなみにピカチュウはこのスタジアムに用意されてある医療施設で美人で素敵なお姉さんであるハピナスに治療してもらったのですっかり元気になっている。

「そう文句言うなってピカチュウ、決まっちまったもんは仕方ねえだろ？」

「嫌だ！ 俺は犬となんかぜってえー組まねえ！ 断固拒否する！」

よっぼどルカリオと組むのが嫌なのか、ピカチュウは頑かたくなに拒み続ける。

「……さっきから黙って聞いてりゃ好き勝手な事言いやがって……まず俺は犬じゃねえ！ そして俺だってネズミ野郎とは組みたかねえよー！」

ピカチュウに好き放題言われ腹を立てたルカリオは怒鳴り声を上げる。

「ネズミだと……言ってくれんじゃねえか貧乏人！」

「やんのかナンパ野郎！」

ネズミと言われたピカチュウも怒りだし、2人は互いに睨み合う。まさに一触即発な状況である。

「……おい、いつまでもギャーギャーとわめくんじゃねえよ。耳障りだ」

「先生と同意見だな……てめえら、俺らを長く待たせんじゃねえよ」

睨み合っている時にどすのきいた声を耳にするピカチュウとルカリオ。

声が出た方に振り向くと、そこには2人のポケモンが立っていた。1人は青を基調とした体色、亀に似た姿をしていてなんでも弾きそうな硬い甲羅カウロを持ち、両肩からはハイドロキヤノンと呼ばれるロケット砲のような物が飛び出している。カメックスと呼ばれるポケモンだ。

そしてこのカメックスは左目に大きな傷があり、せきがん隻眼せきがんになっている。

そしてもう1人は紫がかった白を基調とした体色、背中には大きく立派な翼、両肩にはパールのような寶石が付いており、全体的に竜に似た姿をしている。空間を司る神と呼ばれしポケモン、パルキアである。

「パ、パルキア!?!」

「カ、カメックス!?!」

ピカチュウとルカリオはまさかカメックスとパルキアが出てくるとは予想していなかった為、驚きのあまり声が裏返ってしまう。

「ありや、待ちきれずに来ちゃいましたか……おっと、まだちゃんと紹介してなかつ」

「おいワニ、紹介はいい。とつとと試合始める」

観客達にパルキア達の事を紹介しようとしたオーダイルだが、長

く待たされていてイライラしているカメックスに睨みつけられ、早くバトルを始めると急せかされる。

隻眼で睨むカメックスには相当な迫力があり、思わずオーダイルは一步後ろに下がってしまう。

「は、はい！　すぐ始めますんで！」

カメックスに恐怖したオーダイルは声が裏返りながらもバトルを始めるると返答する。

「ってちよつと待った！　カメックスが相手なのはまだ良いがなんでパルキアが相手なんだよ！？」

パルキアがバトルの相手という事に納得がいかないピカチュウはオーダイルに文句を言う。

「そうだぜ！　カメックスはともかく神と戦えつてのはおかしいだろ！？　俺らぜってえー勝てないじゃんか！？」

全く同じ気持ちだったルカリオもまた、ピカチュウと一緒にオーダイルに文句を言う。

「……おいてめえら、さつきから聞いてりやまるで“パルキア先生抜きだったら勝てる”みたいな言い方じゃねえか……俺が弱いとでも言いてえのか、あ？」

ピカチュウとルカリオに気に障さわるような事を言われ、怒ったカメックスは低い口調で喋りながら2人を睨む。

「あ、いや、決してカメックスが弱いとかそういう訳じゃ……」

カメックスの怖さを知っているルカリオは怯えながらもそうではないと必死に伝えようとする。しかし怒りが収まらないカメックスは2人を睨みつけたままだ。

「……おいワニ、早く試合始める。こいつら今すぐぶっ倒す」

オーダイルにそう言うとかメックスは両肩にあるハイドロキャノン
をルカリオとピカチュウに向け、戦闘体勢に入る。

「は、はい！ で、ではパルキア&ピカチュウ&ルカリオ、試合開始！」

「ハイドロポンプ！」

オーダイルが試合開始を宣言したと同時にカメックスはハイドロキャノンから大量の水をピカチュウとルカリオに向けて勢いよく放出する。

『電光石火！』

ピカチュウとルカリオは素早い身の熟こなしでカメックスが放ったハイドロポンプを当たる寸前で回避する。

「ちっ、始まつちまつたもんは仕方ねえ。おい犬、俺の足を引つ張るんじゃないぞぞ？」

「それはこっちのセリフだネズミ野郎、てめえこそ足引つ張んなよ」

互いに自分の足を引つ張るなど言い合いながら、ピカチュウとル

カリオは素早い身の熟しでカメックスとパルキアに接近していく。

「くられ、10万ボルト！」

ピカチュウは両頬にある電気袋から強力な電気を放出し、カメックスに向けて放つ。

「波導弾！」

ルカリオは体内エネルギーを両手に集め、それを丸いエネルギー弾にしてパルキアに向けて勢いよく放つ。

2人が放った技は一直線にパルキアとカメックスに向かっていく……がしかし、途中で10万ボルトと波導弾は相手に届く前にぶつかり合ってしまった、爆発が発生する。

「なっ!? おい邪魔すんじゃないよ犬！」

「それはこっちのセリフだネズミ!? てめえこそ邪魔すんな！」

自分の技が相手に届かなかった事を人のせいにするピカチュウとルカリオ、チームワーク最悪である。

「水の波導！」

「ハイドロポンプ！」

ピカチュウとルカリオが言い争っている間にパルキアとカメックスは攻撃を仕掛ける。

パルキアは両手で水色のエネルギー弾を作り出し、それを勢いよく放つ。そしてカメックスは再びハイドロキャノンからハイドロポン

ンプを放つ。

言い争っていた2人は回避が間に合わずまともに受け、大きく後方へ吹き飛ばされて背中から地面に倒れる。

「おらあ、まだまだいくぞお！」

パルキアは体内エネルギーを右手に集め始める。すると、右肩にあるパールのような宝石が光り輝きだす。

「くられ、亜空切断！」

パルキアはエネルギーを集めた右手を勢いよく振り下ろし、紫がかった白い三日月型のエネルギー波を放つ。

放たれた亜空切断は凄い勢いでピカチュウ達に向かっていく。

「やばっ!?!」

慌てて起き上がった2人は急いで真横にジャンプしてパルキアが放った亜空切断を回避する。

対象を失った亜空切断は地面に激突し、大きな爆発が発生する。

「ちっ、ハズしたか」

これで決めるつもりだったらしく、亜空切断を回避された事にパルキアは少し残念そうに舌打ちする。

「パルキアの野郎、手加減なしで亜空切断なんか撃ちやがって……
だったらこっちだって遠慮しねえぞ。雲は……よし、出てるな。い
くぜ、雷！」

空にフワフワと浮かぶ雲を確認したピカチュウは軽く笑みを浮かべる。

そしてピカチュウは両頬にある電気袋から先程放った10万ボルトよりもさらに強力な電気を放出、雲に向かって放つ。

ピカチュウが放った電気を受けた雲は雷雲となり、ゴロゴロと音を鳴らせながら雷を放出し始める。そして次の瞬間、雷雲から凄まじい雷が放たれバトルフィールドにいるピカチュウに落下する。

「ぐっ!?!」

雷雲から放たれた自然の雷を受け、苦痛で表情を歪ませるピカチュウ。

しかしピカチュウはなんとか堪え、少しずつ雷のエネルギーを体内に取り込んでいく。

「はああああ!」

しばらくしてようやく雷のエネルギーを体内に取り込む事に成功したピカチュウ。

雷を取り込んだピカチュウの体は金色に光り輝いている。ライジングモードになったのだ。

「な、なんか凄い事になってやがんなあのネズミ……俺も負けてられねえ!」

ライジングモードになったピカチュウを見て対抗心を燃やすルカリオ。

ルカリオは両腕を横に広げ、目を閉じて意識を集中させる。

「無辺、時に切り立ち大地よ 静寂、時に荒々たる海原よ そこか

ら得ん万物が持ちし躍動よ 我が命に従いて 我が手に集いて力となれ！」

意識を集中させながら詠唱

カオス・ワース
混沌語を唱える。

ルカリオを中心に風が渦巻き始め、全身の毛が逆立っている。

「ライジングモードに詠唱か……ふっ、おもしれえじゃねえか。おいカメックス、俺から離れんなよ？ 少し本気でやる」

「わかりやしたぜ先生」

パルキアに離れるなどいわれ、カメックスはパルキアのすぐ隣まで移動する。

「一気に決めてやるぜ、雷！」

「波導は我にあり！ 波導弾！」

ピカチュウは雷、ルカリオは波導弾をパルキア達に向けて放つ。ライジングモードと詠唱によって強化された2人の技はパワーとスピードが倍以上に上がっている。だがしかし、パルキアは慌てる事なく堂々としている。

「んな技くらうかよ……開け、空間の扉！」

パルキアは右手を前にかざす。すると前方に空間の歪みが発生、ピカチュウ達が放った攻撃は歪みの中へと飲み込まれてしまう。

「この攻撃、そっくりそのまま返してやる！」

パルキアは意識を集中させる、すると今度はピカチュウとルカリオの背後に空間の歪みが発生。

そしてその歪みの中から先程ピカチュウ達が放った雷と波導弾が飛び出してきた。

「おわっ!?!」

「ぐっ!?!」

不意を突かれたピカチュウ達は回避する事が出来ずに攻撃を背中に受け、前方に吹き飛ばされつつ伏せになって倒れる。

「くっ……な、なんで俺らの攻撃が後ろから……」

「んなもん簡単だ。ピカチュウ。空間を歪ませて異空間への扉を開き、ためえらが放った技を異空間へ飛ばす。それからまた新たに扉をためえらの背後に作り、飛ばされた技の出口を開いてやっただけだ」

相手が放った技を空間を操る事によってそのまま相手に返す……空間の神と呼ばれるパルキアだからこそ出来る技だ。

「そろそろ決めてやるか……カメックス、同時攻撃やるぞ」

「俺はいつでも良いですぜ先生」

すでにカメックスはハイドロキャノンでピカチュウとルカリオに照準を合わせており、いつでも攻撃出来るよう準備していた。

「いくぞ、竜星群!」

「ハイドロカノン！」

パルキアは体内エネルギーを両手に集めて丸いエネルギー弾を作り出し、それを天高く撃ち上げる。ある程度の高さまで上がったエネルギー弾は破裂して分散、無数のエネルギー弾となってピカチュウ達に降り注ぐ。

そしてカメックスは水のエネルギーを集めた巨大なエネルギー弾を作り出し、両肩にあるハイドロキャノンからピカチュウ達に向けて勢いよく放つ。

「くっ、電光石火！」

ピカチュウとルカリオは痛みを堪え、電光石火でパルキア達が放った攻撃を回避する。

竜星群とハイドロカノンは地面や壁に激突しそうになるが

「開け、空間の扉！」

激突寸前でパルキアが空間に歪みを作り、竜星群とハイドロカノンを歪みの中へ飲み込ませる。

「逃がしやしねえよ！」

竜星群とハイドロカノンを歪みに飲み込ませた後すぐにパルキアは意識を集中させ、ピカチュウとルカリオの周囲にまた別の空間の歪みを作り出す。

「吹き飛びやがれ……ジャッジメント！」

次の瞬間、歪みの中から先程飲み込んだ竜星群とハイドロカノン

が飛び出してピカチュウ達に襲いかかる。

四方八方から襲いかかってくる攻撃をピカチュウ達は回避する事が出来ず、まともに攻撃を受けてしまう。

竜星群とハイドロカノンが直撃した瞬間凄まじい爆発が発生、その衝撃でピカチュウ達は空高く吹き飛ばされ、そのまま地面へと落下して体を強く打ちつける。

仰向けになって倒れたまま、ピカチュウ達はピクリとも動かない。

「あゝらら、完全に気を失ってんなこりゃ……ピカチュウ&パルカリオ戦闘不能！ パルキア&カメックスの勝ちだ！」

ピカチュウとルカリオはこれ以上戦えないと判断したオーダイルがパルキアとカメックスのペアの勝利を宣言、それを聞いた観客達は大きな歓声を上げる。

「やっと終わったか……カメックス、これからちよつと付き合いよ。飲みに行くぞ」

「先生となら、喜んでお付き合いしやすぜ」

ラウンド3（後書き）

オーダーイル

「W兄貴怖えっす（汗）」

まあ、兄貴達ですから（笑）

オーダーイル

「しかし良いのか？ 仮にもルカリオはスペシャルゲストだぞ？」

Linnoさん本人からルカリオもとい犬はボッコボコにして下さいと言われたから問題なし（笑）

オーダーイル

「…………マジかい（汗）」

さて、ラウンド4は誰を出そうかな？

オーダーイル

「そういえば作者、なんで“竜星群”なんだ？ 本来は“流星群”だろ？」

それワザとやってるんだよ。“りゅうせいぐん”ってドラゴンタイプの技でしょ？

だからそれっぽくしようって事で竜星群にしてるんだ。

オーダーイル

「造語…………的な感じか？」

そんな感じかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0079/>

バクフーン達の冒険・番外編 スペシャルエピソード グランドバトル！

2010年10月13日20時22分発行